

コヒオドシ

Aglais urticae

タテハチョウ科

名前の由来

小さいヒオドシチョウの意。ヒオドシは「緋緘」と書き、緋色に染めた糸や革で鎧の札（さね）をつづり合わせたものこのことでこのチョウの翅の色からそのように呼ばれたものと思われる。漢字名：小緋緘



コヒオドシ

チョウ標本：吉原利之氏作成・所蔵

特定種

該当なし。

形態的特徴

翅の表の地色が赤褐色で黒の斑紋のあるやや小形のタテハチョウ。色彩斑紋はオスメス同じで、オスはメスに比べてわずかに翅形がとがる。

類似種と見分け方

ヒオドシチョウ、エルタテハ。

ヒオドシチョウはやや大きく後翅表前縁より黒斑がある。エルタテハは後翅表の前縁寄りに白斑がある。数も多い。



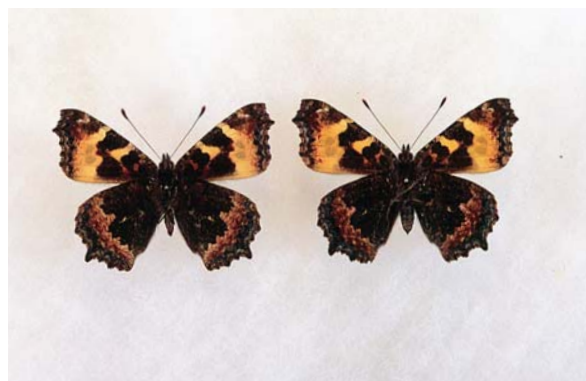
類似種、ヒオドシチョウ（左が表、右がウラ）



類似種、エルタテハ。表（左がオス、右がメス）



コヒオドシ。表（左がオス、右がメス）



コヒオドシ。ウラ（左がオス、右がメス）

チョウ標本：吉原利之氏作成・所蔵

生活サイクル

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
卵期		■										
幼虫期		■	■									
蛹期			■									
成虫期	■			■	■	■	■	■	■	■	■	■

魚類

底生動物

両生類
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

草花
(在来種)

草花
(外来種)

哺乳類

鳥類
(水辺)

鳥類
(草原・樹林)
ワシ・タカ

生育環境・分布

低山地から山地の樹林周辺、夏から秋は高山に多数見られる。

分布：国外分布は、ユーラシア大陸中部から北部。国内分布は、北海道、本州（中部山岳地域）。北海道内分布

は、全域。

十勝地方では、平野部から山間部まで普通に見られる。

繁殖生態・寿命

年1回発生。成虫は6月下旬より見られる。越冬態は成虫。産卵はイラクサ類の芽生えの裏側に100～200個かためて行われる。

幼虫は集団行動を示し、クモの巣状の巣をつくる。成長するにつれ、食草を食いつくし、しだいに分散する。終

齢では単独になり、葉をつづりその中に潜むものもある。蛹化は食草を離れ、付近のササ、ヨモギなどの葉、茎に下垂した形で行われる。寿命：不明。

他生物との関わり

*幼虫はホソバイラクサ、エゾイラクサなどのイラクサ科植物を食草とする。

*成虫の吸蜜植物はムラサキツメクサ、セイヨウタンポポ、エゾノサワアザミなどのほか多くの種が確認されている。

*高山帯に飛来した成虫はノゴマなどの鳥類やシマリスなどに捕食される。

*高山性のクモ類に体液を吸われた記録もある。

*幼虫はヒメバチの一種や寄生蝇の寄生が確認されている。

*幼虫にジョウカイボン的一种とシリアゲムシの一種が襲ったという報告もある。

幼虫の食性（食草）

ホソバイラクサ、エゾイラクサなどのイラクサ科植物。



エゾイラクサ。コヒオドシ幼虫の食草の一つ

興味深い話

■このチョウは本州では高山蝶として知られている。北海道では平地でも発生するが、盛夏になると高地へ移動し、山地のお花畑では何千頭ものおびただしい数が吸蜜する姿が見られることもある。秋に一部が山を降りて越冬する。

■十勝地方のアイヌ語では、チョウ類一般を「マレウレウ」という。

配慮事項

イラクサ科など、食草の自生地が必要。

参考文献

「原色蝶類検索図鑑」猪又敏男 北隆館 1990

「日本のチョウ」海野和男・青山潤三 小学館 1981

「原色昆虫大図鑑 I（蝶蛾編）」北隆館 1978

「学研生物図鑑 昆虫 I チョウ」監修 白水隆 学習研究社 1983

「十勝の蝶」大和与三追悼集 十勝蝶の会 1993

「北海道の蝶」永盛拓行・永森俊行・坪内純・辻規男 北海道新聞社 1986

「原色日本蝶類生態図鑑（Ⅲ）」福田晴夫/浜栄一 他 保育社 1983

「北見の蝶」木村辰正 北見市教育委員会 1994

「知里真志保著作集 別巻 I 分類アイヌ語辞典 植物編・動物編」知里真志保、平凡社 1976

魚類

底生動物

両生類
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)
草花

(外来種)
草花

哺乳類

(水辺)
鳥類

(草原・樹林)
鳥類